# 論説

伊藤冨雄*

## ● 土木高等教育 ●

話はいささか旧聞に属するが，昨 49 年の 6 月，筆者は，土木の関係者としては珍しく，アメリカ合衆国工業教育協会（American Society for Engineering Education, ASEE）の年次大会に出席する機会に恵まれた。この ASEE というのは，工業教育の発展と充実，ならびに技術者の質と地位の向上を願って，学校，特に大学関係者と，その卒業生を受け入れる政府・産業界の人びととが，ひざを交えて話し合う所で，昨年の年次大会は第 82 回ということであるから，前世紀末から開かれているわけで，まずその歴史の長いのに驚かされる。そのうえ，この大会は，会期 1 週間，参加者約 3 000 名，専門部会だけでも総数 139 に及び，そのほかに，200 を越える各種の行事が含まれるという，まことに盛大なものであった。これらの専門部会については，常置委員会などが，単独または協同でそれを主催することになっており，土木・機械・電気などを始めとして，海洋工学・環境工学・宇宙工学・情報システム，あるいは継続教育・教育機器・道徳と法律などに関する 86 の委員会等が主催者として参画している。また，特に興味が深かったのは，ロビー・食堂など，会議場以外の場所で話題になっていることで，それとなく聞いていると，来年私はサバティカル・イヤーにあたるので，あなたの大学で勉強したいと思うがどうでしょうかとか，私の会社ではこんな問題を手がけているが，お宅の大学に適当な専門家はおられませんか，というようなことも話し合っている様子で，この大会が情報交換の場としても，非常に役立っているように思われた。これに対して，戦後わが国でも，ASEE に刺激されて，昭和 27 年，日本工業教育協会（JSEE）が創設され，引き続き全国の 7 地区にそれとは独立に地区協会が設立された。しかし，それらの日常活動はまことに不振であり，JSEE の年次大会は，会期 2 日，参加者はわずか 200 名あまりで，ほとんどが学校関係者，専門の部会は二つか三つという状態で，日米の差があまりにも大きいのに驚かされるのである。

ひるがえって，わが国の土木高等教育に目を移すと，そこには，いくたの問題が横たわっているように思われる。すなわち，学校とくに大学関係者相互の間，ならびにそれらと官公庁・産業界との間で，こと教育に関する限りは，ほとんど対話がなされておらず，そのため，数数の弊害を生じている。例えば，科学技術の発展と社会のニーズに対処するためには，マトリックス構造解析とか，土木計画学・海洋工学・環境工学などを，どの程度まで学部教育に取り入れるべきか，それが大学関係者によくわかっていないようである。したがって，大学院の入学試験のとき，他大学の出身者にたずねると，「波浪や線型計画学のことは習っていないのでできませんでした」という答えが返ってきて，大学の門戸を開こうとするせっかくの願いも，これではうたかたと消え去ってしまう。あるいは，コンピューターの＜コ＞の字も習わずに卒業した人たちが，いまはそれを自由に駆使しているのを見て，大学や会社や学会が，継続教育という意味でそのためにもう少し援助はできなかったのか，と反省してみても，もはやそれは手遅れなのである。そして一番いけないことは，社会の方々が，「大学はどうかお好きなように教育をして下さい。あとはわれわれがやりましょう」「大学は入学試験で頭のよい人を選んで下さるので，それだけで結構なのです」などと考えておられるのではないか，また，大学人はそれをよいことにしているように勘ぐられることなのである。

外国のサル真似はよくないし，日本の船が自動車が地球をかけめぐり，カメラ・テレビが世界中の家々でもてはやされている。しかし残念なことに，こと土木高等教育に関しては，もう少しアメリカを見習ったほうがよさそうである。とりわけ大学の大衆化，大学院大学の構想など，わが国の高等教育制度が転換期にきている昨今，なおさらその感が深いのである。

* 正会員 工博 大阪大学教授 工学部土木工学科，土木学会関西支部長，関西工業教育協会副会長